

第Ⅲ章

「自己有用感尺度」と 分析ツール

自己有用感尺度（質問紙）と、入力や分析に便利な分析ツールを紹介します。さらに、結果の活用例及び結果の読み取りについて、タイプ別に子どもの傾向と自己有用感や関係性を高めるための関わり方の例を示します。

なお、質問紙と分析ツールのデジタルデータは、栃木県総合センター Web サイトにて公開しております。ぜひ御活用ください。

http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/chosakenkyu/h24_jikoyuyokan/

1 自己有用感尺度

次ページに示すアンケート用紙は、本調査研究の成果として開発した自己有用感を測ることができる質問紙「自己有用感尺度」です。平成 23 年度と 24 年度の調査に用いた質問紙の質問 1 の質問項目を検討し、再構成したものです。

アンケート用紙の名称は、「自己有用感」という表現は用いずに、「ふだん思っていることに関するアンケート」という名称にしました。これは、調査に直接関係する文言や表現をアンケート用紙に印刷してしまったり、聞かせてしまったりすると、事前に調査の目的を対象者に知らせてしまうことになり、調査結果に影響が出てしまうことが想定されるためです。実施に当たっても、行事予定表等には「ふだん思っていることに関するアンケート」と記載するなど、配慮する必要があります。

裏面には、教師用ガイドとして、各質問項目が「それぞれどのような関係における自己有用感なのか」「どの要素に関わる設問なのか」、また、「本県児童生徒の回答結果の平均がどれくらいであるか」が分かるように示してあります。

印刷してすぐに調査に使用できる質問紙等のデジタルデータを栃木県総合教育センターWeb サイトにて公開しています。

また、本章 2 「分析ツールの使い方」で紹介する分析ツールは、調査実施後の結果を入力できるフォーマットや様々な目的に合った集計結果をクリックのみで表示できるマクロを用いて組まれた Excel ファイルとなっており、同様に本センターWeb サイトで公開していますので併せて御活用ください。

ふだん思っていることに関するアンケート

成績などには一切関係ありませんので、安心して答えてください。

		年 組 番				
		5	4	3	2	1
(1) あなたが、普段思っていることを教えてください。 なお、「悪口を言う」や「ふざける」などの良くない行動によって「〇〇の役に立っている」などと思う場合は、「あてはまる」には含めません。		とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
No	質問項目	1つえらんで○をつけてください。				
1	わたしは、家の人の役に立っていると思う。	5	4	3	2	1
2	わたしは、家の人を信頼している。	5	4	3	2	1
3	わたしは、家の人と一緒にいると安心できる。	5	4	3	2	1
4	わたしは、家の人に支えられていると思う。	5	4	3	2	1
5	わたしは、家族の重要な一員だと思う。	5	4	3	2	1
6	わたしは、家の人から信頼されていると思う。	5	4	3	2	1
7	わたしは、クラスの人役に立っていると思う。	5	4	3	2	1
8	わたしは、クラスの人を信頼している。	5	4	3	2	1
9	わたしは、クラスの人と一緒にいると安心できる。	5	4	3	2	1
10	わたしは、クラスの人に支えられていると思う。	5	4	3	2	1
11	わたしは、クラスの重要な一員だと思う。	5	4	3	2	1
12	わたしは、クラスの人から信頼されていると思う。	5	4	3	2	1
13	わたしは、先生の役に立っていると思う。	5	4	3	2	1
14	わたしは、先生を信頼している。	5	4	3	2	1
15	わたしは、先生と一緒にいると安心できる。	5	4	3	2	1
16	わたしは、先生に支えられていると思う。	5	4	3	2	1
17	わたしは、先生にとって重要な生徒だと思う。	5	4	3	2	1
18	わたしは、先生から信頼されていると思う。	5	4	3	2	1
		5	4	3	2	1
(2) あなたは、ふだんの生活の中で、次の19から30の経験がどのくらいあると思いますか。		よくある	ときどきある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
No	質問項目	1つえらんで○をつけてください。				
19	わたしは、家の人の手伝いをすることがある。	5	4	3	2	1
20	わたしは、家の人から納得するような意見を言うことがある。	5	4	3	2	1
21	わたしは、家の人から「ありがとう」と言われることがある。	5	4	3	2	1
22	わたしは、家の人からほめられることがある。	5	4	3	2	1
23	わたしは、クラスの人の手伝いをすることがある。	5	4	3	2	1
24	わたしは、クラスの人から納得するような意見を言うことがある。	5	4	3	2	1
25	わたしは、クラスの人から「ありがとう」と言われることがある。	5	4	3	2	1
26	わたしは、クラスの人からほめられることがある。	5	4	3	2	1
27	わたしは、先生の手伝いをすることがある。	5	4	3	2	1
28	わたしは、先生から納得するような意見を言うことがある。	5	4	3	2	1
29	わたしは、先生から「ありがとう」と言われることがある。	5	4	3	2	1
30	わたしは、先生からほめられることがある。	5	4	3	2	1

◎どの質問にも1つずつ○がついているかどうかを、たしかめてください。

このアンケート用紙(自己有用感尺度)は、「自己有用感」を次のように捉え、クラス、先生、家庭での関係性に着目して作成しました。

自己有用感：「他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚」
自己有用感を構成する三つの要素：・「存在感」：他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感
・「承認」：他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況
・「貢献」：他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況
※自己有用感ではありませんが、自己有用感の基盤となる、それぞれとの「関係性」についても質問しています。

※県内各地、学校規模や学校種の偏りなく抽出しました。

2 分析ツールの使い方

「自己有用感アンケート」を実施した後に使用できる分析ツール（集計用 Excel ファイル）を開発しました。

本ツールは、下図中の①に示す入力用のフォーマットと、②の集計結果を印刷できる各種のメニューから構成されています。調査回答を入力してクリックするだけで、各質問項目の回答の素点や平均値が、表やレーダーチャート等で表示され、全体表や個人の表とグラフが印刷できるようになっています。

本項では、グラフや結果から分かることの例を紹介します。

【例 1】校内、学年、クラス等の集団の自己有用感の傾向を把握できる。

【例 2】クラスの全員の自己有用感の状況を一目で確認できる。

【例 3】児童生徒一人一人の自己有用感の詳しい傾向を把握できる。

本ツールによって得られたデータは、個別指導計画作成のための参考資料にしたり、指導の成果を確認するための資料にしたりするなど、様々な活用が考えられます。

分析ツールのメニュー画面（Excel ファイル）

自己有用感調査 * MENU *

① 調査回答を入力。

第2回目の調査回答を入力

第1回目の調査回答を入力

② 印刷をする。

調査人数票を印刷する

調査結果の平均票を印刷する

調査結果のグラフを印刷する

クラス全員分のグラフを印刷する

個人の表とグラフを印刷する（5 名ごと）

個人の表とグラフを印刷する（1 名ずつ）

要素ごとの比較のグラフを印刷する

質問ごとの回答を比較する

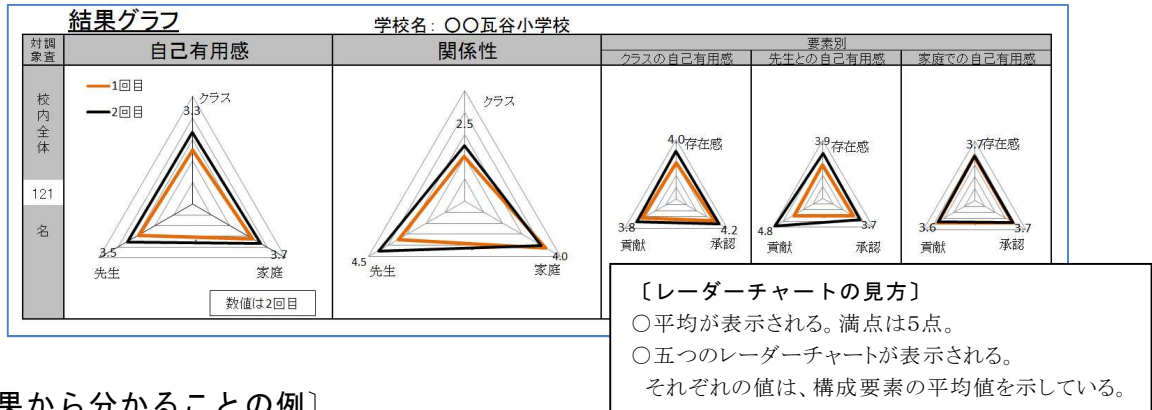
※マクロを有効にして使用してください。

セキュリティの警告 マクロが無効にされました。 オプション...

オプションをクリックして『このコンテンツを有効にする』にチェックを入れて OK ボタンを押してください。

【例 1】校内、学年、クラス等の集団の自己有用感の傾向を把握できる。

…「MENU」→「調査結果のグラフを印刷する」を選択

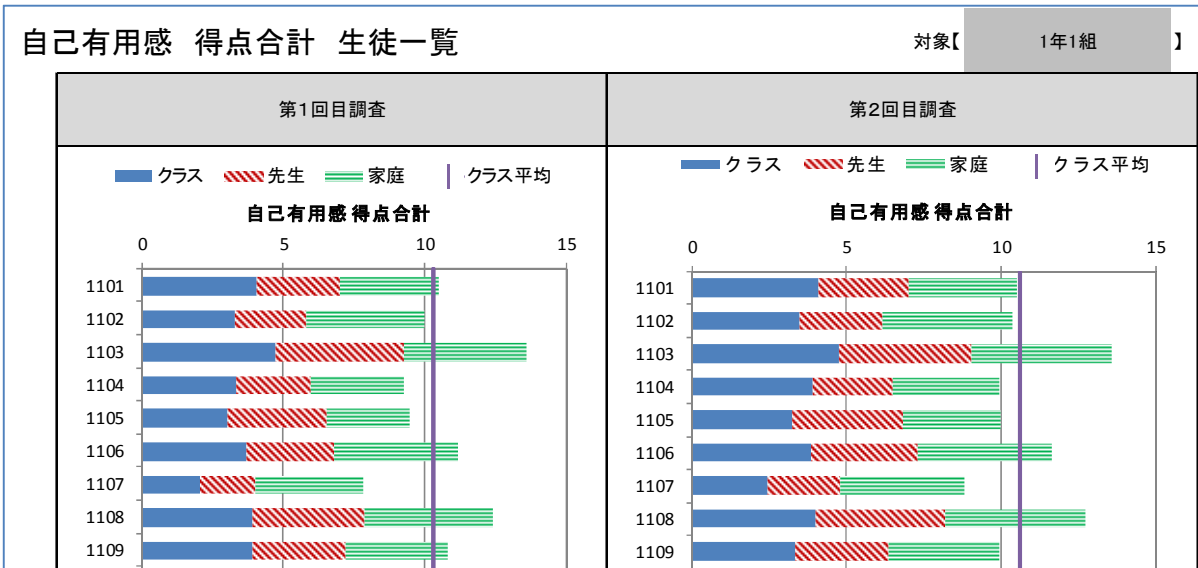


〔結果から分かることの例〕

- 校内全体の自己有用感のうち、1回目の調査と比べて、三つの関係（クラス、家庭、先生）が、全て上がっている。
- 関係性については、先生との関係性が2回目の調査では大幅に上がった。
- 要素別では、クラスや先生との関係における自己有用感の全ての要素が上がった。

【例 2】クラス全員の自己有用感の状況を一目で確認できる。

…「MENU」→「クラス全員分のグラフを印刷する」を選択

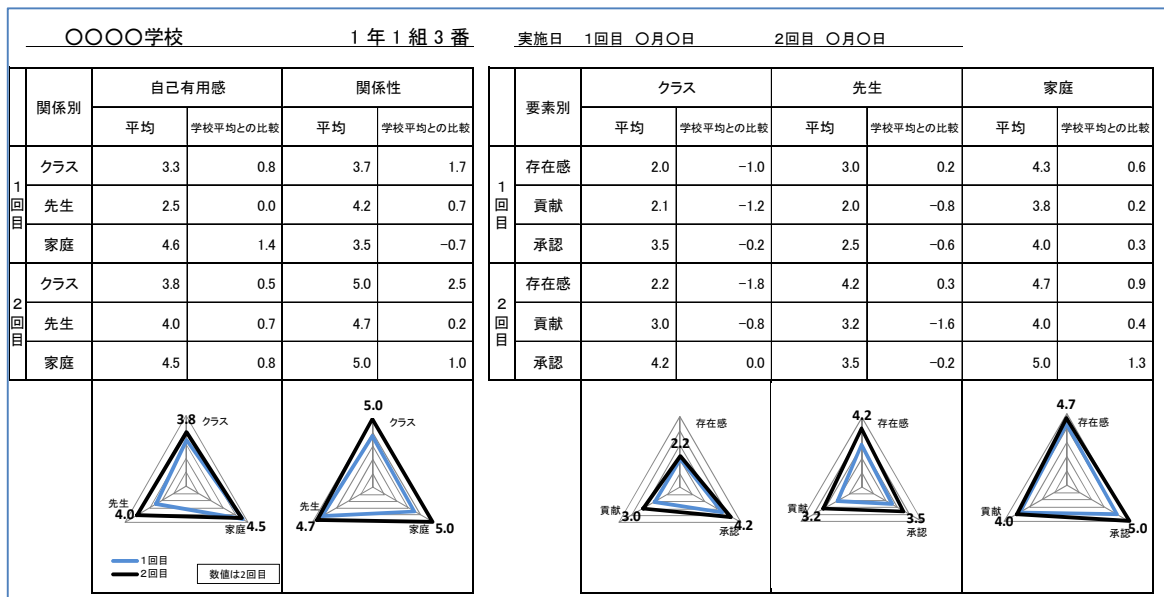


〔結果から分かることの例〕

- 出席番号 1107 番の児童生徒は、特に自己有用感が低い。
- 出席番号 1103 番の児童生徒は、特に自己有用感が高い。
- 2回目の調査では、全体的に自己有用感が高まり、平均が上がった。

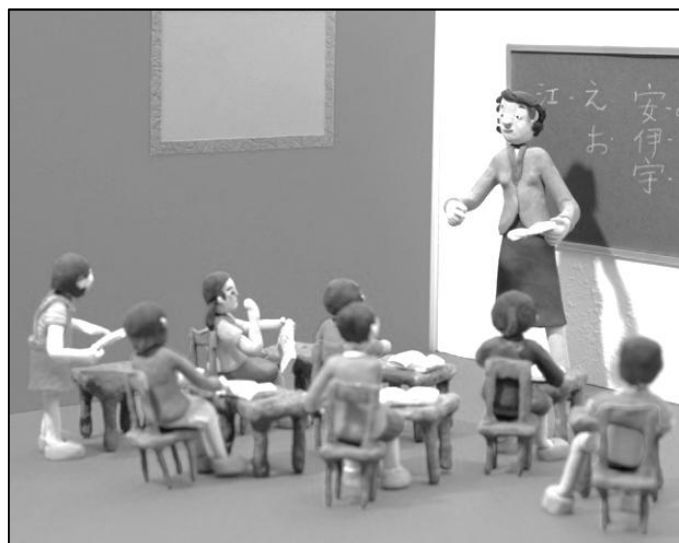
【例 3】児童生徒一人一人の自己有用感の詳しい傾向を把握できる。

…「MENU」→「個人の表とグラフを印刷する（1名ずつ）」を選択



〔結果から分かることの例〕

- 自己有用感及び関係性は、1 回目に比べて 2 回目の方が、全項目で上昇している。
- クラスでの自己有用感が、学校の平均に比べて低い。
- 家庭での自己有用感、非常に高い。



3 グラフから考えられる子どもの傾向

ここでは、個人の結果から考えられる児童生徒の自己有用感の傾向の捉え方や、自己有用感を高める関わり方等の方針の立て方について、例を示しながら説明します。なお、自己有用感を高めるための具体的な関わり方については、第Ⅱ章を参照してください。

（１）自己有用感と関係性のバランスに注目して

はじめに、個人の表の左側「自己有用感」と「関係性」のレーダーチャートに注目し、三角形の形や面積を比較することにより、全体的な傾向を捉えます。自己有用感と関係性は相関が強いため、多くの児童生徒は自己有用感と関係性の形や面積がほぼ同じになります。例 1 に示すタイプ A・B の児童生徒は、自己有用感と関係性のバランスはとれていますが、どちらも低いタイプ B の児童生徒に対しては、＜考えられる子どもの傾向＞を踏まえ、＜関係性や自己有用感を高める関わり方＞を参考に、関係性を改善し自己有用感を高める関わり方や指導等の方針を考えていくようにします。

例 1：自己有用感と関係性が同程度の児童生徒

自己有用感(高)		関係性(高)		＜考えられる子どもの傾向（例）＞
タイプA		タイプA		
面積 大		面積 大		他者や集団の中で、個性を発揮し、生き生きと生活している傾向があると考えられる。また、学習や課題等に対しても積極的で、自己が設定する目標は、概ね達成している傾向があると考えられる。
先生	家庭	先生	家庭	
＜関係性や自己有用感を高める関わり方（例）＞				
他者や集団を認める側として活躍させることで、高い自己有用感を維持させるように配慮する。また、自分をよく見せようと回答している場合も念頭に入れ、継続して観察していくとよい。				
自己有用感(低)		関係性(低)		＜考えられる子どもの傾向（例）＞
タイプB		タイプB		
面積 小		面積 小		対人関係において、自分が思うように関係をつくれな いでいる傾向があると考えられる。また、学習や生活面 で、もっている力を十分に発揮できずにいるか、十分な 力が身に付いていないなどの傾向があると考えられる。
先生	家庭	先生	家庭	
＜関係性や自己有用感を高める関わり方（例）＞				
児童生徒の様子をよく観察し、まずは教師が意図的に役割を与え、見守り、やり遂げさせることで、先生との関係性及び自己有用感を高めさせるようにする。これを足がかりとして、自信をもたせ、他の関係性や自己有用感を高められるよう働きかけていくとよい。家庭の協力も得たい。				

次の例2に示すタイプC・Dは、自己有用感と関係性の状況に差がある児童生徒です。全体から見ると少数ですが、特別な背景や原因等があることが考えられます。

例2：自己有用感と関係性の差異が大きい児童生徒

自己有用感(低)	関係性(高)	＜考えられる子どもの傾向（例）＞
タイプC		
控え目な性格で、あまり人前に出ることを好まず、自己評価が厳しい、まじめで素直な傾向があると考えられる。逆に、今の自分に満足していて、自らを向上させようという意欲がないなど、努力が足りない傾向があるとも考えられる。		
＜自己有用感を高める関わり方（例）＞ 基盤となる関係性はよいので、様々な場面で意図的に「貢献」させることで、「承認」を得られるようにすることに配慮する。教室内では、「否定しない」などのルールを設け、子ども同士で「認め合う」場を増やし、自己のよさに気付かせるよう配慮することも考えられる。また、三つの関係の中から、自己有用感が低い関係を確認し、例3・4を参照に必要な手立てを講じていくとよい。		
自己有用感(高)	関係性(低)	＜考えられる子どもの傾向（例）＞
タイプD		
ある程度、発言力や行動力があり周囲から認められているが、人間関係がうまくいっていない傾向がある。逆に、自分を過大に評価している傾向があるとも考えられる。これらの場合、今後、壁にぶつかったときなど、反動で自己有用感が急激に低下してしまうことが考えられる。		
＜自己有用感を高める関わり方（例）＞ 不安定な傾向があると捉え、配慮する。家庭での関係性も低い場合は、特に注意深く観察していくようにする。要素の状況も考慮して、子ども同士が関わり合い認め合う機会を増やすことや、クラス等で協力して制作する活動に取り組ませるなど、達成感や所属感を感じさせていくとよい。		

【 参考 】

調査した小4から高3までの本県の児童生徒を、学校段階別に、自己有用感と関係性の各学校段階の平均点を境界として四つに分けると、次のようになりました。

表 1.2 栃木県の子どもの自己有用感と関係性の状況（数値は小数第1位で四捨五入）

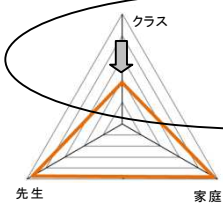
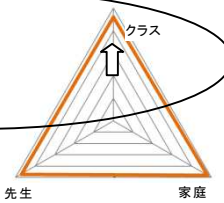
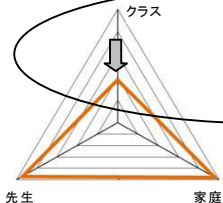
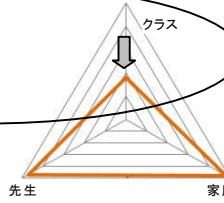
子どものタイプ（自己有用感・関係性）	小学生	中学生	高校生
タイプA（高・高）	47%	41%	42%
タイプB（低・低）	34%	35%	34%
タイプC（低・高）	9%	12%	12%
タイプD（高・低）	9%	12%	12%

（２）「クラスでの自己有用感」に注目して

児童生徒にとって、クラスは生活の基盤であり、そこで育まれる「クラスでの自己有用感」は、各学校段階で共通して最も重要な自己有用感であると言えます。

このため、「クラスでの自己有用感」の低い児童生徒は、特に注目する必要があります。ここでは、次の例3に示す＜考えられる子どもの傾向＞を踏まえ、＜自己有用感を高める関わり方＞に示すような指導の方針について考えます。さらに、要素別の結果にも注目し、低い要素を確認して、関わり方の詳細について検討します。

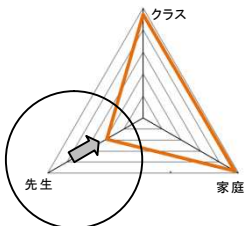
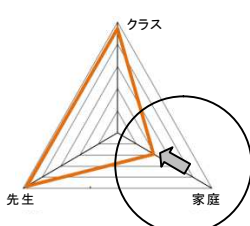
例3：クラスでの自己有用感が低い児童生徒

クラスでの自己有用感（低）	クラスでの関係性（高）	＜考えられる子どもの傾向（例）＞
		性格的に控え目で人前で目立つことが苦手、自己評価が低く、自分に対する自信がないなどの傾向があると考えられる。
＜自己有用感を高める関わり方（例）＞ 基盤となる関係性がしっかりしているので、活躍の場を与え、自信をもたせられるように配慮する。また、達成が確認しやすい役割やスモールステップの課題等を与え、やり遂げさせる経験とそれに対して承認される経験を重ねることで、少しずつ自信をもたせていくようにするとよい。		
クラスでの自己有用感（低）	クラスでの関係性（低）	＜考えられる子どもの傾向（例）＞
		大人とはうまく関係をつくれるが、クラスでの関係はつくれずにいるため、居心地が悪いと感じている傾向があると考えられる。または、他者や集団と同じ生活や行動をすることに難しさや抵抗を感じているなどの傾向があると考えられる。
＜自己有用感や関係性を高める関わり方（例）＞ 多くの先生方の協力を得ながら、観察や面談を通して原因や背景について明らかにするとともに、阻害する要因を取り除いたり、低くしたりするように配慮する。少なくとも「先生は、あなたのことを気にかけている。」というメッセージが常に本人に伝わるように関わっていくとよい。同時に、所属するクラス全体へも、協同することや、人権を尊重することへの指導も大切である。		

(3) 「先生との関係における自己有用感・家庭での自己有用感」に注目して

先生との関係性や自己有用感は、大人や目上の人との関係性とはほぼ同意と考えられます。また、家庭は他者と関わる社会生活の最も基本的な場であり、家庭での関係性や自己有用感が低い児童生徒には、何らかの背景や問題があると考えられます。

例 4：先生との関係における自己有用感・家庭での自己有用感が低い児童生徒

先生との自己有用感（低）		先生との関係性（高）	先生との関係性（低）
		＜考えられる子どもの傾向（例）＞	
		先生を頼らずに、自立している傾向があると考えられる。高校生に多い。	何らかの理由で、先生や学校、または大人等に否定的な感情をもっている傾向があると考えられる。
＜自己有用感や関係性を高める関わり方（例）＞			
先生との自己有用感：（低）、関係性：（高）		先生との自己有用感：（低）、関係性：（低）	
比較的容易に自己有用感を高めることが可能である。「先生方から声をかける」「児童生徒の話をじっくり聞く」など、直接関わる機会を増やしていくとよい。		左記の関わり方のほか、校外のボランティア活動への参加を促すなど、意図的に先生や大人との関わる場を設定し達成感を味わわせるとよい。また、先生方同士や家庭との連携を密にして、否定的な感情をもつ理由等を明らかにしていくとよい。	
家庭での自己有用感（低）		家庭での関係性（高）	家庭での関係性（低）
		＜考えられる子どもの傾向（例）＞	
		親や家族に依存しているか、自律的な生活ができていない、またはさせていない場合が考えられる。中学生で多くなる。	何らかの理由で、家庭に居場所がない、又は、注目を集めるための反社会的な行動をとる傾向がある。
＜自己有用感や関係性を高める関わり方（例）＞			
自己有用感：（低）、関係性：（高）		自己有用感：（低）、関係性：（低）	
家の人が欲しいものを与えたり、失敗をしないように手をかけ過ぎたりする過保護や過干渉の場合が考えられる。家の人は発達とともに「子どもに任せ、見守る姿勢」が大切であることや、「できないことを叱るより、できたことを褒める」など、子どもの実態に応じて関わり方を工夫する必要があることについて、保護者会等を通じて働きかけていくとよい。		家族からの保護や支援を受けられていない場合や、安らぐ場所を求め家庭や学校以外に居場所を求めてしまう場合が考えられる。まずは先生との関係性や自己有用感を高めることからはじめ、徐々にクラス内で「承認」が得られるようにし、家庭訪問等により家庭との連携を図っていくとよい。	

